様式3

学 校 番 号

61

令和4年度　学校評価書　　（計画段階・実施段階）

福岡県立小郡高等学校

自己評価

学 校 運 営 計 画 （4月）			評　価（総　合）
学校運営方針	明るく豊かな心と英知に富み、たくましい精神力と強靭な体力をもとに、力強く生き抜く意志と意欲をもつ若人の育成を目指す。		A
昨年度の成果と課題	年 度 重 点 目 標	具 体 的 目 標	
「グローバル人材育成強化校」の指定を受け、全ての教科で英語活動指導員（EAS）による英語イマ―ジョン教育を実施することで、授業改善を行い、学区内の中学校や地域から高い評価を得ている。今年度は「Be the Change～自らが望む変化は自分で引き起こしなさい」をスローガンに、自らの手で未来を切り拓き、激動の未来を生き抜くたくましい生徒の育成を目指す。 一方、生徒が自ら判断・思考・表現する機会を増やし、生徒の自己肯定感をさらに高めていけるよう、生徒一人一人の心の寄り沿う指導を、すべての教育活動において浸透させることが課題である。 【育成を目指す資質・能力】 〇考え抜く力（シンキング） 〇前に踏み出す力（アクション） 〇チームで働く力（チームワーク）	観点別評価による指導の充実を図り、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」を培う調和のとれた教育活動を推進する。	本年度で5年目となる「グローバル人材育成強化校」として、更に指導力をバージョンアップし、論理的思考力・判断力及び表現力に加え、実践的な英語力を身に付け、グローバルに活躍できる力を持った人材の育成を図る。	
		観点別評価による指導の充実を図り、全教科において判断・思考・表現の機会を増やし、生徒一人一人の多様な個性を伸ばす学習指導の工夫改善を行う。指導と評価の一体化を図り、生徒の意欲やチャレンジを引き出し、確かな学力の育成・定着と自立的学習態度を養う。	
		生徒へのガイダンス機能を高め、規則正しい生活習慣と、挨拶・掃除・容儀・時間厳守など集団生活を営む上での自己管理能力の育成とともに、学習習慣の確立を図る。	
		「文武不岐」の精神のもと、部活動への積極的な加入を促すとともに活動内容の充実を図り、心身の調和のとれた発達を促す。	
	キャリア教育の意義を踏まえ、高い志をもたせるとともに困難な目標や課題を生徒個々に設定させ、自己の可能性を伸ばすことで、希望進路を実現させる。	3年間を見通した進路指導計画に基づき、各学年の目標と考査・各種試験やガイダンス等を学年指導や教科指導とより密接に連動させることで、生徒の希望進路の実現を図る。	
		OGR（Ogori Global Research）プロジェクトの充実を図り、「総合的な探究の時間」を活用するなどこれまで以上に、より体験型で発展的な活動を展開する。このことをとおして、課題発見力、計画力、創造力などの「考え抜く力（シンキング）」を育成する。	
	同窓会や後援会との連携による知的チャレンジ・ボランティアへの取組を強化し、生徒により多くの体験を積ませることで主体性や積極性を育成する。	学習活動や各種行事をはじめ、日常の様々な場面において、チャレンジする機会を設けることで、挑戦力・攻める力・主体性・実行力・働きかける力などの「前に踏み出す力（アクション）」を育成する。	
		本年度から施行される成年年齢の引き下げを踏まえ、部活動・生徒会活動・ボランティア活動において、失敗・成功を含め、より多くの体験を積ませることで、「チームで働く力（チームワーク）」を育成するとともに社会参画における主体性と自他を尊重する豊かな心を育む。	
		自他を大切にする心を養い、いじめ等のない安心して学べる環境を構築する。	
	組織を活性化させ、教育活動の充実を図るとともに保護者や地域と協力して「社会に開かれた教育課程」「地域と共にある学校」の実現に努める。	学校経営会議と校務運営委員会の充実をとおして、学校運営方針を浸透させる体制を作り、若手教員の人材育成を図るとともに、働き方改革を推進する。	
		インターネットを活用した教育支援システムを教育活動のあらゆる分野で活用することにより、新しい入試システムへの対応や働き方改革への対応に加え、多様な生徒への対応、緊急事態時や災害時等または、長期休業中の学習指導体制の強化を図る。	
		ホームページ等を用いて生徒の活躍や日常の教育活動をきめ細かに発信し、地域からの信頼や理解を得る。また、中学校訪問や進路相談事業等において広報委員会を中核とした全職員による組織的な広報活動を展開することで、本校の教育方針の周知に努める。	

学校関係者評価

評　価（総　合）	自己評価は
A	A ： 適切である B ： 概ね適切である C ： やや適切である D ： 不適切である

評価項目	具体的目標	具 体 的 方 策	評価（3月）			次年度の主な課題	項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見
学習指導	新学習指導要領に基づいた観点別評価の適切な実施と指導内容・方法の改善	「知識・技能」「思考・判断・表現」力の向上を目指した定期考査の改善・充実を図る。	A	A	A	新学習指導要領に基づいたカリキュラムをスタートさせるにあたり、3観点に基づいた観点別評価を全学年で実施したが、指導と評価の一体化を進める上では効果があった。しかしながら、適切で説明責任を果たすことのできる評価であったかについては、課題も残る。今後、日常の授業での指導方法、考査のあり方や課題の効果的な出し方など、具体的に生徒の学力を向上させ、生徒保護者に説明できる評価方法について検討する。	A	・教育活動におけるICTの活用は、教員の意識改革が難しく、苦労をしている学校も多いなかで、本校は研修の回数を倍増させて教員一丸となって取り組んでいるので、高く評価できる。 ・働き方改革を推進していかなければならないこともあり、教員がしっかり生徒と向き合う時間が取れるよう、バランスのよい教育活動を今後も展開してほしい。
		「自主的に学習に取り組む態度」の育成を目指した指導法、評価方法を改善し充実させる。	A					
		観点別評価に直結した指導方法を確立させ、生徒・保護者への周知を徹底する。	B					
	進路実現に向けた確かな学力の育成と自発的な学習やチャレンジ精神を引き出す学習指導の確立	進路指導計画に基づいた学習指導計画を作成し、日常の授業の指導力を強化する。	B	A		教室のプロジェクターや生徒一人一人へのクロームブック配布など、ICT環境が劇的に変化することによって、授業の進め方や方法に工夫が必要となる中、本校では各担当者が様々な工夫を凝らした授業を展開しているのが感じられる。今後は生徒に対して、進路目標をにらんだ具体的な成績の向上に向けていかに授業を改善していくかがカギとなる。学校全体の進路指導計画をもとにした検討が必要である。		
		研修部と連携して、ICTのさらなる活用を含めた教員の授業力の向上を図る。	A					
		Classiを活用して、生徒が自分で考え学習する力や自主的に学習に向かう態度を育成する。	A					
	グローバル人材育成強化校としての特色ある学習指導の工夫・改善による学習指導の強化	英語イマージョン授業で得た知識やスキルを活用できるような環境や場面を整える。	A	B		グローバル人材育成強化校となって5年目となるが、年々、回数や内容に向上が見られるものの、今後この取組を活かした学校の特色の構築という点では不十分である。英語イマージョン授業のみでなく、学校全体として取り組む教育内容の検討が必要である。それが、地域に根差した学校づくりにもつながり、小・中・大との連携・接続にも役立つであろうと考えている。		
		校内の協力体制に基づいた地域や外部と連携した「地域とともにある学校」を目指す。	B					
		小・中学校や大学と連携した接続教育を意識した学習指導の方法について情報提供する。	B					
生徒指導	生徒の自己指導能力や主体的に取り組む姿勢の育成	基本的生活習慣（時間厳守、容儀、静止礼を含む挨拶や言葉遣い）の育成や実践力の向上を図る。	A	A	A	風紀指導を定期的に実施したこともあり大きな乱れはなかった。次年度は生徒会役員による呼びかけ等生徒主体の取組も取り入れていく。情報モラルの指導については外部講師による講演を含め、継続して実施した。次年度も未然防止に向けて継続して取り組んでいく。また、今後の感染状況にもよるが、再度挨拶の指導に力を入れていく。	A	・生徒会活動の活性化に重点を置いている点は高く評価できる。 ・県教育委員会からの通知により、令和5年度からの校則を見直すにあたって、保護者・生徒・職員の意見をしっかり聞く機会を設けて進めてきたことはとても評価できる。 ・主体性をもって行動できる生徒の育成が鍵である。そのためには、学校行事や生徒会活動で教員がすぐに指導するのではなく「待つ」ことが大事である。 ・学校のいじめ防止基本方針に基づいて、初期対応を行い、認知をしていることが大切であるので、いじめがあった場合でも評価はAでもよいと思う。
		服装・頭髪検査を定期的に実施するとともに、校内風紀を主体的に遵守する態度を育成する。	A					
		携帯電話やインターネット等については情報モラルを含めた適切な活用を継続して指導する。	A					
	学校安全の充実を図るとともに、安全に対する意識の向上や実践力の育成	学校いじめ防止基本方針に基づく取組を行い、家庭や保健環境課と連携していじめの未然防止や早期発見、迅速な対応に努める。	B	B		規範意識育成学習については次年度も積極的に外部講師を招聘し内容の充実を図っていく。また、いじめ防止に向けた取組についてはいじめ防止委員会を中心として組織的かつ継続的に取り組むことができた。次年度も未然防止や早期発見・早期対応に向けた取組を行っていく。乗車マナーについては継続して指導してきたが、外部から苦情が入ることがあり、具体的な事例を活用しながら次年度も継続した指導が必要である。		
		外部講師を積極的に活用して、各種教育の充実を図る。	A					
		事故等の未然防止に向けた取組に加え、乗車マナーを含む公衆マナーの指導を行う。	B					
	生徒会活動の活性化や、豊かな人間性、部活動生を中心とするリーダーシップの育成	これまでの生徒会活動の流れを踏襲しつつ、自ら変化を創る機会を通して新たな諸活動に取り組ませることで社会性や主体性の伸長を図り、生徒会活動の活性化を図る。	A	A		新しい生徒会規約の運用1年目であるが、以前と比較して主体的に活動する集団になりつつある。今後も新たな取組を取り入れながら生徒会活動の活性化を図っていく。また、今年度の部活動加入率は目標の80%に届かなかったが、学校行事等でリーダーシップを発揮する人材は育成できている。来年度も継続して仮入部期間の充実を図る。ボランティアについては依然として感染拡大前の状況ほどの案内はないが、今後も積極的な参加を呼びかける。		
		部活動加入率80％以上を目標に1年生仮入部期間を充実させ、様々な活動を通してリーダーシップを発揮する人材の育成を図り、部活動の活性化を目指す。	B					
		ボランティア活動に積極的に参加させ、体験を通して豊かな人間性の育成を目指す。	A					

進路指導	生徒に高い志を持たせその実現に必要なキャリアデザインの育成	自己管理手帳（スコラ手帳）とClassiを活用し、各分掌・学年と連携して、生徒自ら計画を立て学ぼうとする姿勢を伸ばす。	B	A	A	進路ガイダンスでは、外部講師の活用を重点においた。講師からの発言等により生徒の意識が変わった場面が多く見られ効果があったと考える。今後も様々な方面からの講師を招き生徒の進路に対する意識を向上させていきたい。生徒が自ら計画を立て学ぶ力をつけるためには、達成したものを目に見える形で示していく必要がある。具体的なデータを示しこれだけのことが達成したのだというこうとを示していくことが今後の課題である。	A	・キャリア教育については、進路ガイダンスを行い、上級学校を招いての出前講座や地域の団体と連携した職業人講話などに取り組んでいる点は素晴らしい。今後は地域の様々な職能団体等にも連携の輪を広げていくべきである。そうすることで、小郡市の様々な企業・団体にさらに本校の魅力をアピールできる。 ・中学校の保護者が子供の進路選択の際に参考にするのは、高校の進路実績である。本校は今年度、例年以上に進路実績を出しているので、是非しっかりと広報をしてほしい。 ・フィールドワークによる教育効果は高い。今後も実施に向けて前向きに検討してほしい。
		進路ガイダンスを通し生徒のキャリアデザインの基礎を構築する。	A					
		生徒向けの校外活動プログラムを周知徹底し、積極的な参加を促す。	A					
	OGRプロジェクトにおける深い探究活動を通しての考え抜く力の涵養	１年（社会を知る）：課題研究の基礎を学び、地域の課題に取り組み、質疑応答を取り入れた発表を通して考える力の基礎を身につける。	B	B		OGRプロジェクトにおける探究活動は、そのまま入試に直結していくものであり、一年生の段階から自己実現にむけた取組であることを意識させなければならない。総合的探究の時間だけでなく、HRや学校外での活動なども含めた内容と流れを構築していくことが次年度に向けた課題である。また、フィールドワークを予定していたができなかったので時間配分等を工夫していきたい。本やネットの二次的な情報だけでなく直接見て感じる一時的な情報から探究を深めさせる取組がより必要である。		
		２年（世界を知る）：SDG’sや生徒が探究したいもので課題を設定し教科横断的に探究活動に取り組む。またその成果を発表することで、分かりやすくまとめ表現する力を身につける。	B					
		３年（未来につなぐ）：入試研究や志願理由書作成に加え、進路ガイダンスを充実させることで自己の在り方生き方に関わる探究を深め、進路目標実現に主体的に取り組む態度を確立させる。	B					
	模擬試験等の活用による希望進路実現に向けた事前事後指導の徹底	模擬試験に向けたPDCAサイクルを確立させ、生徒に具体的な学習における目標を持たせる。	A	A		模擬試験等の活用については、きめ細やかな指導と結果の活用に重点をおいた。教科内の分析に加え、外部講師による分析を行い今後効果的な活用を図れるように取り組んでいるところである。セミナーについては、初年度ということもあり、時間的確保はできているが、より効果的にするため入試の直結した内容に中身を精査しなければならない。また、生徒がより進路に応じて受講できるように工夫していく必要がある。		
		結果を含む様々なデータを活用し、きめ細やかなキャリアカウンセリングを行う。	A					
		生徒の進路希望実現に向けたセミナーの設定と学力を最大限に伸ばす指導を行う。	B					
第１学年	基本的生活習慣の確立と 自己管理能力の育成	心身ともに健康で、生活リズムを乱さず、出席皆勤率５０％を目指す。	B	A	A	高校生活へとステージが変わり、3年間の土台となる基本的生活習慣の確立をしなければばらない、大切な1年間であった。理想とする望ましいレベルまで到達に向かう途中であると考える。急に、ハイレベルを目指すのではなく、しっかりと生徒たちと向き合い、彼らに考えさせながら、自ら行動できるよう、次年度も各行事・活動へ取り組む仕掛けを十分考え、生徒たちが動くのを待つこちらの姿勢も大切と考える。	A	・生徒達には「どこに進学し、就職するか」ではなく「進学・就職したところで何をするのか」が大切であることを日々の教育活動を通じて伝えてほしい。 ・部活動は人間形成の視点からも大切な活動であるので、加入については継続して促進してほしい。
		TPOをわきまえた行動ができる、自己管理能力の育成を図る。	A					
		清掃活動を通して、自発的に、そして協力して取り組むことで、周囲への気遣い感謝の気持ちを育成する。	A					
	進路意識の高揚と目的意識を持った 学習習慣の確立	授業規律や教材教具の管理を徹底させ、学習環境を整え、学習習慣の育成を図る。	B	B		進路意識を高めるには、まずは学習に対して意欲的に取り組めること、つまりは授業をよく理解できることがあると考える。それが自己肯定感に繋がり、進路意識の向上にも繋がる。特に1学年の始まりは、色々なモチベーションをもって、今自分がいる場所が正しいかどうか迷っている状況も多い。このような時期だからこそ、入学後の導入期の中で、丁寧に進路・教務・生徒部から話す機会を設定する必要性を感じる。		
		Classi等を活用して、学習計画や目標を設定させ、先を見通す力を育成しながら、生徒の意欲・チャレンジ精神を引き出していく。	B					
		総合的な探究の時間等を利用し、自己の進路について考えさせる機会を増やし、進路目標を明確化・行動できる基盤を作る。	B					
	自ら変化を創り出し周囲を巻き込む 行動力・コミュニケーション力の育成	部活動加入率９０％を目標に、その他学校行事に積極的に参加させることで「チームで働く力」を育成する。	B	A		部活動加入率は目標値には至らずだが、校外活動に取り組む生徒もいる。ボランティア活動に参加した生徒も多く、その点はよく頑張った。校内での活動にとどまらず、校外で実施される様々なコンテストやボランティア活動等から学ぶ経験もこれから先の進路へも十分に繋がると考えるので、教員側も様々なコンテスト等の活動も含め、次年度も生徒の内面から成長させる機会を提供していきたい。		
		検定試験・ボランティアを含む諸活動など生徒がチャレンジする機会を設け、「前に踏み出す力」を育成する。	A					
		学校生活全般で生徒が発言する機会を多く設定し、リーダー性や自己肯定感を持たせる。	A					

第2学年	基本的な生活習慣の確立と協働的な学びの実現	健康の保持増進や規則正しい生活など、生徒が自己管理能力を高める指導を行い、6割以上の出席皆勤者を目指す。	B	A	A	現在出席皆勤者は約50%と目標には届いていないが、学年全体の日々の出席率は高い。時間を守って行動することもほぼ出来ており、自ら授業開始時までに着席している生徒が多い。 各クラスでの朝礼や終礼の進行を生徒にさせたり、修学旅行やクラスでの仕事もできるだけ生徒の委員会を活用することで、学校生活に主体的に取り組む意識を高めることが出来ている。	A	・新型コロナウイルス感染症の拡大への対応が迫られたこの3年間で、全国的にも出席皆勤へのこだわりやその意義が失われつつあることは残念である。本校は設立当初から出席皆勤と静止礼に力を入れていた。これらは教育の「不易と流行」で言うならば、不易の部分であり、新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後は、是非その伝統を復活させてほしい。 ・自学や面談に力を注いで、生徒一人一人にきめ細やかに対応している点は高く評価できる。
		挨拶やタイムマネジメントの質の向上を図り、落ち着いた学校生活を送ることができる生徒の育成を目的とした指導を行う。	A					
		集団で協力して主体的に取り組む姿勢や能動的な関わり方を学ばせるために行事や委員会活動等での活動を充実させる。	A					
	社会の変化に対応できる確かな学力の向上と進路目標の明確化	授業を軸とした学習活動や家庭学習の充実・徹底を図り、生徒の意欲と理解力を高め、幅広い学力の向上を目指す指導を行う。	A	A		学校裁量の時間を利用して自学の時間を多く取り、自主的に学習する習慣をつけることが出来た。また、個人面談にも多くの時間を割くことが出来、生徒に将来のビジョンや現状について考えさせることが出来た。 それに対して、生徒への進路情報の提供の機会を学年として設定する取り組みが出来ず、体系的な進路指導とならなかった面がある。		
		生徒が自らを理解し、課題を解決しながら将来のヴィジョンを広げることができるように進路行事を充実させる。	B					
		自分のしたいこと（進路）とできること（学力等）を把握できる力を育み、将来の目標を明確化させる。	A					
	豊かな人間性と集団の中で好影響を与えるリーダーの育成	行事や委員会活動、部活動において積極的に関わる姿勢を育成し、学校の中堅として学校全体の活性化につながる指導を行う。	A	A		各クラスで朝礼や終礼の進行を生徒に任せたり、連絡事項も生徒の係がホワイトボードを見てクラスに落としたりといった作業を地道に続け、生徒の主体的な意識を高めることが出来た。修学旅行においても生徒の意見を修学旅行委員を通して吸い上げ、吟味し、再検討させるといったプロセスを経験させたことで学校への帰属意識やリーダーシップを持たせることが出来た。来年度の大運動会や三国が丘祭につないでいきたい。		
		大運動会や文化祭、修学旅行などの学校行事に積極的に参加し、それぞれの場面でリーダーが育成するよう指導していく。	A					
		40周年記念式典や、ボランティア活動への参加を通して、社会への関心を高めさせ、社会に貢献する姿勢態度を育成する。	A					
第3学年	行事や学習、部活動に対して積極的に挑戦・探究する態度の育成	大運動会や三国が丘祭等の学校行事にリーダーとして積極的に参加し、会議や意見交換を繰り返しながら、物事を実現可能な段階に引き上げるための思考力・判断力を養う。	A	A	A	大運動会や三国が丘祭は、伝統を引き継ぎつつも、新たな取組も積極的に行い、これまで以上に生徒主体の行事になった。その一方で、新たな試みには様々な改善点もあったため、生徒の主体性を大切にしながらも、教師との連携をより密にしていく必要がある。3年生となり、学習や部活動に対して、より意欲的に取り組むようになったが、目標を設定しても行動が伴わない生徒が目立つため、目標達成のために主体的に努力する態度を養う必要がある。	A	・学校行事等をとおして、生徒の主体性を大切に指導しており、またその際に生徒とのコミュニケーションを十分に取りながら意欲を引き出し、目標を設定している点は大いに評価できる。 ・すばらしいキャリアモデルとなる卒業生がたくさんいる。大いに活用してほしい。
		授業で学習した内容を深く掘り下げてその意味や意義を追求し、教員との対話や生徒同士の対話の機会を多く設けることで、自分の言葉で表現できる力を身に付けさせる。	A					
		部活動やその他の運動の機会において常に新しい目標を設定し、どの場面においても自らの資質・体力・技術力の向上を図る。	A					
	地域に貢献し、先見性があり国際的な視野を持ちながら行動できる人材育成	ボランティアへの積極的な参加を促し、地域社会との繋がりや連携について考えさせる。	B	A		部活動と大運動会を終え、そのまま受験勉強に入った生徒が多数であった。ボランティアを通して社会貢献をする経験は、生徒たちの大きな財産となるため、次年度は今年度以上に参加を促す必要がある。また、イマージョン授業を通して英語が身近なものになりつつあるが、この授業をきっかけとして生徒の視野を広げていくためには、他の授業や日常の学校生活の中でも、地域社会や国際社会に目を向ける機会を継続して与えていく必要がある。		
		教員・生徒ともに時事や国際社会における正確な情報収集を行い幅広い知識を得ていくなかで、広い視野を持った人材を育成する。	A					
		イマージョン授業を有効的に活用し、多角的なものの見方・考え方に触れることで柔軟な発想を促し、国際的な感覚を身に付けさせる。	A					
	主体的な考察・活動による進路選択と進路実現	大学進学、就職、就職後のことについて具体的なキャリアプランを持たせ、希望進路実現のための意識を明確化させる。	A	A		自身の将来についてよく考えたうえでキャリアプランを立てることができているが、現状で手が届く選択肢の中から選んでいる傾向がある。したがって、地元に限らず、幅広い選択肢について考えた上で進路選択をさせる必要がある。そのためには、生徒一人一人と進路について話し合う時間をしっかりと確保し、生徒のニーズを把握したうえで、多くの選択肢を生徒に提供できる体制づくりが必要である。		
		進学・就職に必要な知識・学力・技術力・資格等を調査し、希望する大学や企業をより具体的なものとすることで進路実現に集中して臨ませる。	A					
		生徒にとってよりよい進路を見出すため、教員間で常時、大学や企業の情報を更新・共有する。	A					

保健環境	健康であるために、自ら正しい健康知識を身に付け、実践できる生徒の育成	生徒保健委員会等を中心に、健康的な生活の大切さや感染症の予防対策などを保健だより等を利用し情報発信を行い、生徒が主体的に考え、行動できるように育成する。	A	A	A	保健委員会の取組は、保健委員長、副委員長と各学年の代表が主となっているので、学年ごとの取り組みなどを各委員が自ら考え、行動できるようにする。また、新型コロナウイルス感染症の影響はまだあるものの、様々な行事を実施できるようになってきているので、保健委員中心に企画を立て保健活動ができるように支援する。さらに、感染対策など健康意識を高めていくための取組を検討する。	A	・スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの役割が具体的に教育活動に位置づけられ、大いに活用していることが分かる。 ・生徒一人一人についてサポート体制を組み、丁寧に取り組んでいる点が大いに評価できる。
		授業や行事等あらゆる場面を通して、健康維持に向けて、集団の中の個として想像力を生かして生活できるように促進する。	A					
		研修や啓発を通して、教員が模範となり、実践できるように推進する。	A					
	環境美化活動の精神のもと、地域社会に積極的に貢献できる人材の育成	清掃活動の意義を理解させ、自分の役割の範囲を超え、自ら協力して活動できる生徒を育成する。	A	A		環境委員がより積極的に活動できるように、日々の清掃活動や行事での取組を生徒とともに検討していく。また、掃除区域の広さと生徒数との関係が今後厳しい状況になっていくので、試験の最終日などに大掃除の時間を設け、回数を増やしていく。なお、美化コンクールの実施時期・方法については検討する。		
		生徒環境委員会を開催し清掃活動の課題を見出し、改善する態度を習得できるように支援する。	A					
		美化コンクールを実施し、生徒の環境美化活動への意識の向上を図る。	B					
	自他を大切にし、尊重できる豊かな心の育成を図り、充実した生活の確保	月に1回の学校生活アンケートの実施し、さらに教育相談員会を開催して、教員間での生徒の情報共有し、対応の検討と対策を実施する。	A	A		多種多様な問題を抱えた生徒が増えているので、スクールカウンセラーの援助を得ながら継続的、組織的に対応していく。また、生徒と保護者との関係について、悩みを抱えているケースが起こっているので、スクールソーシャルワーカーなど外部機関との連携をさらに強めていく。		
		心の相談によるスクールカウンセラーの助言を活用し、生徒の問題に対して適切な支援を行う。	A					
		生徒への支援が早期に対応できるように専門医や学年会や委員会の連携を図り対応する。	A					
研修図書	学ぶ意欲に溢れた主体的な学習を促すための授業改善の推進	ICTを積極的に活用した『わかる授業』を念頭に授業展開する。	A	A	A	ICTを活用した授業は、職員研修や公開授業を経て、各自が実践を始めた段階である。「Googleクラスルーム」等を用いた双方向型の授業を確立することが課題である。英語イマ―ジョン授業は、考えを英語で発表する機会を以前より設けることができたので、代表者だけではなくより多くの生徒に発表させる時間を確保したい。観点別評価は主体的な取り組みを授業にどのように取り入れ、どう評価するかが課題である。	A	・職員研修や公開授業などを系統的・継続的に実施することで、授業改善の推進を積極的に行っている点が大いに評価できる。 ・読書活動については、日常生活の様々な場面でデジタル化が進むなかで、紙媒体の書物との出会い、ふれあいは高校時代の貴重な体験になっていくだろう。今後も是非、紙媒体による読書活動を推進してほしい。
		英語イマージョン授業で論理的思考力、判断力、表現力の育成を目指す。	A					
		観点別評価に基づく授業の改善を行う。	B					
	スクールミッション達成のための職員研修の充実	教育目標と現状を分析し、必要な研修の組み立てを行う。	A	A		研修の組み立ては、必要に応じて組み替えたり短時間の研修を増やしたりしながら、年に10回程度実施することができたので、今後も臨機応変に行いたい。研修内容は、演習や意見交換を取り入れた実践的な取り組みができたが、次年度はさらに要望を取り入れていきたい。外部講師を招いての研修は、ICTで1回、受験指導で1回だったので、スクールカウンセラーによる研修等、生徒指導関連でも実施したい。		
		職員の要望に応えながら、意欲的に取り組める研修内容を計画する。	A					
		外部講師を招いての研修を実施するなど、専門的かつ新たな視点から学べる研修も実施する。	B					
	豊かな人間性育成のための図書館利用・読書の推進	朝の読書の代替となる読書推進活動を構築する。	B	A		朝の読書の代替活動は、計画的に実施することができなかった。図書委員や国語科とも連携しながら、ビブリオバトルや本紹介POP作成等を計画していきたい。図書委員は図書館だよりの発行、読書アンケートの実施、プレゼントを準備したイベント等、様々な活動を行うことができたが、来館者や貸出数の増加に繋げるためには、さらに工夫が必要である。授業や行事で生徒全員が本を借りる機会を作っていきたい。		
		生徒の図書委員会を中心に、文化祭等の活動を充実させる。	A					
		図書館だよりを発行し、授業における図書館活用を促す。	A					

企画	スクールミッション達成のための効果的な企画	行事予定や変更を早く提示することで、計画的に教育活動ができるようサポートする。	A	A	A	行事予定は昨年度より早く提示することができたが、行事実施後のアンケートについては、実施できないこともあった。また、コロナ禍の影響で、全体で集合する形態で行事が実施できないことが今後も予想されるので、各行事の役割の見直しや配信用機材の取り扱いができる人材の育成等に力を入れる。	A	・多忙な校務の中、PTAや同窓会の事務等に多くの時間を費やしているのではと推察する。役員の方々との連絡では、電話のみならずメール等を活用するなど、時短に努めてほしい。 ・令和5年度の創立40周年記念行事の企画等も、無理のない範囲で進めてもらいたい。
		各行事でアンケートを実施し、よりよい行事づくりに努める。	A					
		防災教育の視点から3年間を通しての「防災避難訓練」を計画し実施する。	B					
	生徒がみずからの可能性にチャレンジする教育活動のための他分掌や保護者との連携	各学年・各分掌と連絡調整を密に行い、行事を通して生徒の主体性を育成する創意工夫を行う。	A	A	A	「PTA・同窓会への教育活動の理解を図る協力体制」の構築を目標としていたが、すでに様々な援助（奨学金等）をしていただいている。今後とも本校教育活動の理解を深め協力していただけるように、生徒だけでなくPTAなどの活動もホームページを通じて情報発信をしていくようにする。来年は、創立40周年を迎えるので職員・生徒ともに行事を通して愛校心を高育めるように計画的に進める。		
		父母教師会・同窓会と総会や新聞発行を通して、教育活動の理解を図り協力体制を構築する。	B					
		愛校心を育てる、40周年記念行事の組織づくりを行い準備する。	A					
	校務の円滑な運営のための環境整備	職員・生徒が活動しやすいよう、掲示など環境を整える。	B	A		作業机や印刷まわりなど職員室等の環境を整えることができたが、さらなる改善を職員の声を聞きながら来年度も進めていく。また、各行事の記録管理については、他分掌と協力して行うことができた。なお、基本情報の作成・管理については、途中の変更・追加がスムーズにできていない時があり、次年度は改善する。		
		各行事の記録・管理を行うことで、生徒・各分掌の活動をサポートする。	A					
		基本情報（職員名票・緊急連絡先等）の計画的な作成と管理を行う。	A					
広報	学校の魅力を効果的に発信するためのさらなる広報活動の充実	各分掌と連携し、本校の魅力を伝えられる学校案内パンフレットを作成する。	A	A	A	学校案内パンフレット作成において、本校の特色や雰囲気が伝わるような工夫ができた。各分掌との連携を強めていく。また、ホームページ自体の更新頻度は十分だったが、部活動の活動実績などは各部に協力を仰いでさらなる充実を図りたい。 さらに、本年度の新たな取組として、インスタグラムを開設し、生徒の姿や行事への取組を積極的に発信することができた。YouTubeなど動画での発信も力を入れたい。	A	・これからの学校広報活動において、SNSでの発信は大きなポイントである。インスタグラムの開設など、すでに取り組んでおられて素晴らしい。 ・中学校に対するアプローチだけではなく、小学校との交流にも力を入れてはどうか。特に本校は英語イマージョン教育に力を入れているが、英語教育の若年化が進んでいることに鑑みれば、本校の特色を小学校へのアピールに活かすことができると考える。小郡市内の小学校8校との交流を通して、小郡高校への肯定的なイメージを早い段階から持ってもらうことも大切である。
		ホームページにおいて、中学生の閲覧数が多いもの(部活動など)のさらなる充実を図る。	B					
		校内での生徒の姿・取り組みを積極的に発信する。	A					
		中学生体験入学等で、生徒による魅力発信の企画を実施する。	A					
		YouTube等を利用し、さらに幅広い広報活動を展開する。	B					
	効果的な広報活動のための情報収集	中学生向け行事等のアンケート結果を通し、広報活動の改善を行う。	A	A		中学校訪問や説明会、塾訪問など職員の協力・調整を得て効果的に実施できた。進路相談事業や体験入学、オープンスクールなど例年に近い形で実施することができ、運営や発表を通して在校生の魅力を直接伝えることができた。ステージ発表やポスターの作成などより一層の工夫をしていく。		
		積極的な中学校・教育機関訪問を通し、情報の収集を図る。	A					
	写真・動画など広報に関わる材料の積極的収集・管理	各行事において広報材料の収集を行う。	A	A		写真や動画など、各行事において広報資料を十分に集めることができた。各分掌との連携を強めて、様々な場面で活用していく。		
		広報材料の一括管理を進め、様々な場面で広く広報活動が行える環境を整える。	A					

情報	電子黒板や無線LANを活用した授業の定着	普通教室での電子黒板やクロームブックを活用した授業を円滑に行えるようICT支援員と連携してサポートを行う。	B	A	A	一人一台端末の導入が完了し、授業でのクロームブックの活用が少しずつではあるが増えている。しかし、教科や学ぶ分野によっては活用しづらい所もあるので、次年度では年間の授業計画の中で活用する場面を設定するなど、効果的に活用するために工夫が必要である。電子黒板やOneDriveについては、授業の中で日常的に活用されているので今後も継続して推進していきたい。
		緊急事態時や災害時等や長期休業中の学習強化のためのオンライン学習の準備・推進を行う。	A			
		電子黒板を活用した授業の実施に際し、OneDriveを積極的に取り入れていくよう推進する。	A			
	校務用ネットワークおよびICT機器の適切な管理	部屋の予約や職員間の連絡に、学校ポータルサイトの積極的に活用し、連絡の迅速化を図る。	A	A		一人一台端末の導入により、生徒がクロームブックを持ち帰ることが増えてくる。そのためトラブル等も増加すると考えられるので迅速に対応できるようにしていく。また、ICT活用の手引きを作成したが次年度を通して変更すべき点があれば適宜対応していく。年度を通して様々なICT機器が増えているので故障等のトラブルがあれば県のサポートセンターや事務室と連携をとり対応していく。
		校務用パソコンの保守については、県のサポートとの連携をとりトラブルに迅速に対応する。	A			
		タブレットやプロジェクタやUSBメモリ等の管理を確実に行う。	B			
	他の分掌や学年との連携	研修図書課と連携し、校内研修等でICTの活用についての研修を行う。	A	A		情報課だけでは、様々なことに対応できないので次年度も継続して他の分掌や学年と連携していく。配信システムにおいては今年度も学校行事や講演など様々な場面で使用したが操作できる教員がまだ一部であるので、次年度は使用できる教員を増やしていく。また、研修図書課と連携してICT機器の活用についての校内研修を行うなど、今後もICT機器の活用を推進していく。
		他の分掌と連携してホームページ作成、Classiや統合支援システムの活用のサポートを行う。	A			
		配信システムを学校行事や集会等で円滑に活用できるよう他の分掌や学年と連携を図る。	A			

A	・ICTの活用や英語イマージョン教育などは教育の「不易と流行」の流行の部分で、時代の要請に応じて精力的に取り組むものである。そこにしっかり注力していることがよくわかる。 ・ICTを活用した教育活動の充実に力を入れているのがよくわかる。機種の設定、メインテナンスや授業の準備等に多くの時間を割いていると拝察する。しかしながら今後推進していくべき教育活動であることは確かであり、組織的な取組によって一部に負担がかからないように工夫をしてほしい。

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

・学校行事や生徒会活動、部活動等においては、教員がすぐに注意するのではなく、丁寧なコミュニケーションと、待つ姿勢を徹底させ、生徒の主体性を育む。
・ICTを活用した教育活動の充実について、引き続き重点的に進めていく。特に教員側の「教えるツール」から生徒達が「学ぶツール」となるよう双方向の授業を進める。
・教育活動の「不易と流行」の双方を大切にし、挨拶や出席皆勤を目指す姿勢などコロナ禍で注力できなかった教育活動の「不易」の部分を再度見直す。
・小・中学校を含めた地域との連携を強化する。英語イマージョン教育という本校独自のリソースをさらに活用する。
・SCやSSWなどとの連携を充実させ、生徒一人一人へのサポートを丁寧に行う。特別な配慮が必要な生徒への指導については、組織的に対応する。

評価項目以外のものに関する意見
コロナ禍での様々な困難をリーダーシップと協働により乗り越えてきた。今後さらに教員のリーダーシップと生徒達のリーダーシップが調和する中で、40，50周年を目指して小郡高校らしい校風を築いていくことを希望する。